月影

第73号

令和四年三月一日発行
浄土宗西山禅林寺派
常林院

信心は心の杖

悲しみの中で
阿弥陀仏を想い
往生を願い

大切な人と
浄土での再会を
信じることは

この世の
心の杖(つえ)となる

開宗八五〇年 法然上人の生涯【十】

選択本願念仏集

東大寺で講義

大原談義（おおはらだんぎ）は法然上人の名を仏教界に広く知らせることになりました。

その四年後、大原談義に参加していた東大寺の重源上人（ちょうげんしょうにん）は法然上人に東大寺で講義をしてほしいと依頼します。

この重源上人は、源平の戦いで焼け落ちた東大寺を再建に導いた僧侶です。当時は大仏さまもほとんど焼け落ちており、とてもひどい状態でした。

重源上人から依頼された法然上人は、まだ再建中だった東大寺で「浄土三部経」の講義をされました。その教えは広く南都仏教界に響くことになりました。

九条兼実

法然上人の名が広まるにつれて、弟子の数も増えていきました。その中の一人に、のちに関白になる九条兼実（くじょうかねざね）がいます。

九条兼実は、四十一歳の時に法然上人に出逢われ、その人格にすっかり敬服されました。その後、法然上人の弟子となり、生涯を通じて、法然上人を支え続けられました。

念仏の教えを執筆

法然上人は六十代半ば頃になると、病にかかることが増え、一一九七年には重い病気になり、一命を取り留めたこともありました。

九条兼実は、「上人にもしものことがあっても、上人の教えを記した書物がない。このままでは、お念仏の教えが途絶えてしまう」と危惧（きぐ）し、法然上人にその教えを書物にまとめてくださいとお願いしました。

この願いに応じた法然上人は、執筆にとりかかり、「選択本願念仏集（せんちゃくほんがんねんぶつしゅう）」を完成させました。

「選択本願念仏集」とは、

「すべての人を救おうとされる阿弥陀仏は、数ある行の中から、お念仏を選びとられ、お念仏によってのみ、私たちがお浄土に往生できるのです」という意味であり、私たち宗派にとって、もっとも重要な書物となりました。

（つづく）

仏事と作法

葬儀式(四)

葬儀・告別式

今からおよそ十万年前にいた私たち人間の祖先ネアンデルタール人は、すでに死者に花を供え、丁寧に埋葬していたことが遺跡からうかがえるといいます。

「弔いたい」という感情は、本来、人間に具わっている自然な感情なのかもしれません。

葬儀式の役割

葬儀式には大切な役割があります。

①宗教的役割
死者を浄土に送る

②社会的役割
死を社会に知らせる

③心理的役割
死の受容
悲しみを癒す

④物理的役割
遺体を葬る

しかし、最近は葬儀式自体が簡素化し、その役割にも変化が起こっています。特に、家族葬の増加により、死を社会に知らせるという「社会的役割」が消えてしまったように思えます。最近お見かけしないと思っていたら亡くなられていた、という話はよく耳にします。

葬儀式の流れ

昔の葬儀式は、①出棺式（自宅から斎場へ出発する式）②葬儀式（引導を渡し戒名を授ける式）③告別式（お別れの式）の三つの法要を別々に勤めていました。

しかし、時代と共に変わり、現在は三つの法要をお葬式の中で一緒に勤めています。

引導を渡す

葬儀式の中で、最も大切な儀式が「引導」です。

時代劇で「引導を渡す」というセリフを聞くことがありますが、もともとは、人々を仏道に導くことを意味します。

葬儀式の中では、導師（僧侶）が棺の前に立ち、故人に対して法語や経文を読み、故人がお浄土へ旅立つことを導くために言い渡す言葉のことをいいます。引導の中で戒名も授けます。

引導の作法の中で、導師が松明を掲げる場面があります。これは松明で棺に火をつけているところを表しています。

仏教歳時記

涅槃図の虎も泪す釈迦の裾

石井大泉

お釈迦様は沙羅双樹の木の下で、旧暦二月十五日に入滅されました。涅槃図には、お釈迦さまの周りに、弟子をはじめ、鳥獣虫魚などが悲しみのあまり、泣き崩れる姿が描かれています。

涅槃会は、涅槃図を掛けて、お釈迦さまを追慕報恩する法要です。

涅槃図（常林院蔵）

雑記抄　～たのしみは～

歳を重ねるとともに、月日が早く過ぎるように感じます。気忙しく過ごしていると、あっという間に一年が経ってしまいます▽さらに、今はコロナ禍です。自粛生活が続き、生活の中に喜びを見いだせず日々過ごしているという人がたくさんいます▽幕末の歌人で国学者であった橘曙覧は、こんな歌を残しています。

「たのしみは　朝おきいでて　昨日まで　無かりし花の　咲ける見る時」

〝楽しみは、朝起きた時に、昨日まで咲いていなかった花が咲いていた時〟

▽日常の何気ない出来事を「たのしみは～とき」で繰り返し、五十二首の歌を「独楽吟」として残しています。前述した歌の他にも、たのしみは～子どもがうまいうまいと食べている時、知らない鳥が来て鳴いている時など、読むと心が和みます▽自身を顧みると、毎日バタバタと過ごし、身近な出来事に気づくことさえありません▽大きな幸せを求めることよりも、日々、身の回りのちょっとした楽しみを感じながら生活するほうが、人生にとって豊かで大切なことなのだと教えられます。